

第26回 長谷川貢 神田外語学院元教務センター長  
教育の質と成果にこだわる専門学校を目指して

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」



1980年代の終わりに神田外語学院へ入職し、長年にわたって教育部門の責任者を務めてきた人物に長谷川貢氏がいます。高校教員としての経験、英語教授法に関する専門的な知識、そして英語教育への探究心を生かし、35年にわたり神田外語学院の教育を支えてきた長谷川氏に学院の歩みと進むべき道についてお聞きしました。(構成・文:山口剛/文中敬称略)



昭和32(1957)年に生まれ、横浜市の金沢文庫で育ちました。父は航空機の部品製造の会社に勤めていました。幼い頃、父の関係でボーイング社から派遣されたアメリカ人技術者の子どもたちと遊ぶ機会がありました。でも、英語が話せないから遊ぶことができない。英語を話せるようになりたいと思った最初の体験でした。

中学校からバドミントンを始め、高校は強豪校の神奈川県立横浜立野高校に進学しました。顧問だった杉田博先生(故人)は、この県立高校を何度もインターハイ出場に導いた優れた指導者でした。いつか教員として母校に戻り、杉田先生の築いたバドミントン部の伝統を引き継ぎたい。それが高校の教員を目指した最大の理由でした。昭和52(1977)年4月に明治大学の文学部英米文学科に進学し、英語教員を目指しながらバドミントンを続けました。大学を卒業し、昭和56(1981)年4月に神奈川県内の県立高校で英語教員となりましたが、母校に赴任することはできませんでした。

昭和57(1982)年の国体では神奈川県代表に選ばれましたが、プレイヤーとしての限界を感じ、ラケットを置きました。これから高校でバドミントンの指導者として人生を歩むのであれば、英語教員としてもプロになりたい。行けるところまで行ってみよう。バドミントンで常に上を目指してきたので、そう思ったのかもしれない。



英語の読み・書きを教えるのは問題ありませんでしたが、聞く・話すについてはまったく自信がありませんでした。文部省(現・文部科学省)は当時、英会話の授業を高校英語の学習指導要領に入れる方針を打ち出していました。きちんと勉強し直さないと、恥ずかしくて英会話の授業などできません。

英語科の教員でも英語を話せないのは当たり前の時代でしたが、自分はそうなりたくない。そう思うと、居ても立ってもいられませんでした。英語教授法(TESOL)の修士号を取得することを決め、高校の教員を退職し、3年間の教員生活でためたお金をはたいて、アメリカのニューヨーク大学院へ留学しました。昭和59(1984)年7月、26歳のときです。ニューヨークは移民の街なので、英語を第一言語としない外国人に英語を教え、社会に溶け込ませる必要性から英語教授法が発達していました。それがニューヨーク大学院を選んだ理由です。

第26回 長谷川貢神田外語学院元教務センター長  
教育の質と成果にこだわる専門学校を目指して

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」



聞く・話す能力は子ども以下だと認め  
ゼロから学び直したニューヨークでの日々

現地で生活し始めると、英語がまったく通じません。タクシーの運転手に行き先を伝えようと地名を何度発音しても通じなくて、メモを見せて説明する。運転手の発音を聞いて、アクセントが違っていたことに気付く。英語は発音よりもアクセントをどこに強く打つかが大事だと分かりました。現地に行ってみないと分からないことがある。面白くなりました。

英語で恥ずかしい思いをした経験は数え切れません。英語の読み・書きは現地の学生とも変わらないくらいできるけれど、聞く・話す能力はアメリカ人の子ども以下だと認めて、開き直りました。実力を伸ばすには、自分の位置を知る必要がある。これもバドミントンから学んだことですね。開き直ってしまうと、聞く・話す能力はどんどん伸びていきました。

アメリカで「英語を教えること」とは発話によるコミュニケーションを教えることであり、まさに私が学びたかったことです。やりたいことができ、毎日、授業に出るのが楽しかった。今思えば、あの時、決断して本当によかったと思います。修士号を取得して昭和 61(1986)年 8 月に日本に帰国しました。

帰国後の約 1 年間、神奈川県立住吉高校で臨任教員を務めながら、神奈川県教員採用試験を受け直し、昭和 63(1988)年 4 月からは正式な教員として川崎の高校に赴任する辞令を受けました。しかし、当時はまだ高校の英語には英会話の授業がありません。学習指導要領では英会話の授業が設けられていましたが、実施するかどうかの選択は各高校の判断に任されています。しかし、教えられる教員がないので、英会話の授業を実施する高校などないのが実情でした。

ニューヨークで学んだことが生かせないのであれば、高校の教員を続ける意味はない。それと、バドミントンを指導したかったので、ふたたび母校への赴任を希望しましたが通らなかった。「もう、いい」と思い、県立高校の採用を辞退しました。

英会話学校や専門学校で教員の職を探していたときに出合ったのが、読売新聞の片隅で見つけた神田外語学院の教員募集の広告です。すぐに連絡をして東京・神田にある学院の教育部を訪れました。神田外語学院はラジオ講座のスポンサーをしていたので名前は知っていましたが、それぐらいの認識でした。

対応してくれたのは当時、副学院長を務めていたアントン・グディングス先生でした。トップがアメリカ人で、英語で採用面接をする。専門学校でありながらアカデミックな雰囲気がして、アメリカの学校に近いという印象を持ちました。採用試験を受けたその日のうちに合格の連絡を受けました。



第26回 長谷川貢神田外語学院元教務センター長  
教育の質と成果にこだわる専門学校を目指して

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」



常識を打ち破る最先端の語学教育を提供し、  
優秀な卒業生を輩出していた 80 年代の学院

私が非常勤講師として教え始めた昭和 63(1988)年当時の神田外語学院は、ものすごい勢いがありました。在籍する学生数は 3000 人以上。1 クラス 45 人で教室は学生でいっぱいです。2 限目が終わったらダッシュで教室から飛び出さないと、階段が学生で詰まってしまう昼食の時間が短くなってしまふほどでした。

教育の特徴は外国人教員の授業が数多く受けられることです。公立高校でも外国人教員による英会話の授業が始まっていましたが、訪れるのは月に1 回程度です。一方、学院では外国人教員による授業を毎日受けられるのです。

授業では東芝と共同開発した「コンピューター語学システム(Computer Assisted Instruction System)」も導入していました。ひとり 1 台ずつコンピューターを使って、画面に表示される英語の問題に解答していくシステムです。当時では大学も含めて最先端の語学教育機器だったと思います。

昭和 62(1987)年 4 月には千葉の幕張に神田外語大学が開学していました。外国語教育の分野で、専門学校が大学をつくってしまうなんて、あり得ないことでしたから、とても話題になっていましたね。

そして「就職の神田外語」と言われるほど、就職の実績が高かった。専門学校生ですが、英語能力は上位の大学の学生に負けないほど優秀です。毎年、何十人という単位で航空会社の採用試験に合格してCAになりました。英検1級の合格者が何人もいたし、私の担当していたクラスでは日本銀行に就職した学生がふたりいました。

神田外語学院は、私がニューヨーク大学院で学んできた英語教授法の理論や方法論を実践できる場でした。英語教授法は実社会で使える英語を教えるための研究です。使える英語の習得を目的とした語学専門学校こそが英語教授法の知識やスキルを求めているのです。当時はまだ、大学教員の多くが「英語を話せるようになりたいなら、街の英会話学校にでも行けばいい」と思っていた時代でした。

非常勤講師となった私にグディングス副院長は、「リーディング&ライティング」の授業を持たせてくれました。本来は、外国人教員しか教えられない授業で、英語で教えることが条件です。私は高校の教員時代、あまり英語が得意でない生徒が多い学校で教えていました。だから、学院でも学生がどこで間違えるのかが分かった。少しでも日本語を交えながら丁寧に教えていき、英語が面白く書けるようになるよう指導を心掛けました。学院ではすでに学生が教員を評価するアンケートを実施していましたが、リーディング&ライティングを教える71人の教員のなかで1位を取りました。その結果通知は今でも記念に取っています。



第26回 長谷川貢神田外語学院元教務センター長  
教育の質と成果にこだわる専門学校を目指して

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」



日本の英語教育に大きな影響を与えたタスクベース学習法の研究と実践

平成元（1989）年4月、神田外語学院の専任講師となりました。非常勤講師から、1年間で専任講師になるのは異例の早さでした。

教え始めて驚いたのは1980年代の後半から神田外語学院が「タスクベース学習法」の研究に取り組んでいたことです。グディングス先生が、神田外語大学のフランス・ジョンソン教授と始めたプロジェクトです。

タスクベースとは、学生に実生活で英語を使う場面の課題を与えて、その解決を通じて必要な英語を学んでいく学習法です。単に英文や単語を丸暗記する従来の英語教育とはまったく異なるものです。

このプロジェクトには、オーストラリアのマッコーリー大学で研究をしていたクリストファー・カンドリン教授、そしてデイヴィッド・ヌーナン教授がコンサルタントとして参画しました。ふたりとも英語教授法の学会ではスタンディングオベーションを受けるような世界的に著名な研究者です。言語学でいえばチョムスキーぐらいの権威が神田外語学院に来て、アドバイザーを務めたのです。平成4（1992）年、平成5（1993）年のことでした。

私もプロジェクトに参加することができました。カンドリン、ヌーナンの両教授に教授法について尋ねると、次から次へと専門書のタイトルを教えてくださいました。本当に貴重な体験でした。学院では、平成6（1994）年にタスクベース学習法を導入し、翌年にはオリジナルの教科書「Options」を使い始めました。

JALT（全国語学教育学会）で、学院がタスクベース学習法について発表したときには、会場で立ち見が出るほどの盛況ぶりでした。主に大学の研究者が発表する学会で専門学校の発表がこれほど注目を集めるのは異例なことでした。

高校の英語の教科書では、チャプターの最後にある練習問題を「エクササイズ」としていましたが、それがある時期から「タスク」に変わりました。

先生の発話する英語を復唱するのではなく、生徒に課題を与えるタスクでは、グループでタスクを解決する内容を考えて、必要な単語を探していくうちに、自然に会話が巻き起こる。それが語学の効果的な習得につながるのです。教科書のエクササイズがタスクに変わったことに神田外語学院の教育と研究は大きく貢献していると思います。



第26回 長谷川貢神田外語学院元教務センター長  
教育の質と成果にこだわる専門学校を目指して

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」



英語の先生方に惜しみなくノウハウを提供し、  
神田外語への信用を高めた英語教育公開講座

平成4（1992）年、神田外語学院では「英語教育公開講座」を一般の英語教育関係者向けに実施し始めました。担当者は広報部長を務めていた児玉朗さん。私はプログラム内容の立案で児玉さんをサポートするとともに、講義も担当しました。学院ではこの講座を、高校の先生方への認知度を高め、信用を得るためのPRの場と位置付けていました。ですから、広報部が担当していたのです。



私も高校で教員をしていたのでよく分かりますが、高校の先生方は、大学についてはたくさんの知識があります。生徒が大学に進学すれば、高校の実績になるからです。しかし、専門学校についてはあまり知りません。生徒から「卒業後、英語を勉強したいのですが、どの学校がいいですか？」と聞かれた先生に、「専門学校だったら神田外語学院がいい」と言ってもらうにはどうしたらよいか？ 生徒への絶大な影響力を持つ先生方に神田外語学院を勧めてもらうには、学院の英語教育を知ってもらい、何よりも「信用」を得る必要があったのです。

1990年代に入り、中学高校の英語教育は、読み・書き一辺倒から脱却して、コミュニケーションについても力を入れ始めました。現場で英語を教える先生方は危機感を覚えていたと思います。しかし、先生方は忙し過ぎて授業のアイデアや教材作りを考える時間がほとんどありません。



神田外語学院の英語教育公開講座では、コミュニケーションを主体とした教授法のノウハウを惜しみなく提供しました。私も学院での教え方や教材作りのノウハウを提供できたら先生方はきっと助かるだろうと思ってプログラムの内容を考えました。参加費用はテキストの実費程度ですので、基本的には学院が持ち出しで行っていた企画です。

毎年、夏に開かれる講座には数多くの先生方が参加しました。先生方にとっては情報収集と交流の貴重な場となり、レポートする先生方も数多くいました。公開講座は神田外語学院の教育をPRする絶好の場となり、継続することによって、「専門学校で英語を学ぶなら神田外語学院」という信用が培われていきました。教育の世界では、継続こそが信用を得る手段なのです。

私は平成15（2003）年に佐野学園の職員になり、神田外語学院の教育部門を管理運営する立場になるのですが、公開講座には引き続き力を入れました。平成19（2007）年からは英語教育で著名な研究者や有識者が登壇する基調講演を実施しました。神田外語学院の東京会場だけで参加者は600人を超えました。東日本の主要都市にも会場を広げていき、最盛期には1000人を超えるイベントとなり、神田外語の名前を広め、信用を得るのに大いに貢献しました。

第26回 長谷川貢神田外語学院元教務センター長  
教育の質と成果にこだわる専門学校を目指して

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」



女子生徒の4年制大学進学が急増し、  
学院の入学者は最盛期の半数まで減少

専門学校は就職が目的ですから、志願者数は社会や経済の情勢に大きく左右されます。神田外語学院も例外ではありませんでした。

1990年代の後半になると、神田外語学院の入学者数は減少し始めました。その要因のひとつは男女雇用機会均等法です。この法律は昭和61（1986）年に施行されましたが、定められていたのは雇用時の規定のみでした。しかし、平成9（1997）年6月の改正によって、それまで努力義務だった採用や昇進、教育訓練などでの差別が禁止規定となりました。つまり、待遇面でも女性を差別してはいけないと定められたのです。

女性の自立が社会的に保障されたことにより、優秀な女子生徒は4年制大学に進学するようになりました。1990年代の前半までは、女性にとって就職に有利な進路は短期大学や専門学校であり、一部上場企業に就職するには有名短大に進学するのが王道でした。状況は大きく変わり、有名女子短大の多くが学生募集を停止しました。神田外語学院の入学者数も急激に減少し、26クラス（約1100人）あった英会話本科は8クラス（284人）にまで減ったのです。

神田外語学院といえば外国人教員を数多く採用し、国内にしながら外国にいるような環境で英会話を学べることが最大の魅力でした。しかし、学生数が減少すると人件費をはじめとする固定費が学院の経営を圧迫。入学者数が最盛期の半数である700人台まで減少した平成10（1998）年には、希望退職者を募る初めてのリストラを断行しました。社会的には国際化が盛んに叫ばれ、大学では「国際」を称する学部学科が増加していた時期です。英語教授法の修士号を持つ優秀な外国人教員たちが学院を離れ、各地の大学へと移っていきました。

平成15（2003）年4月、フィルソン・リチャード・マイケル学院長に代わって神田外語学院のトップとなった水野五行学院長から依頼され、私は専任講師から佐野学園の職員となりました。役職は、神田外語学院の教育部門を管理運営する教育部門長です。

この時期になると入学者数は回復し始めていて、平成14（2002）年から平成17（2005）年までは1000人以上を維持しました。入学者数増加の理由は経済的な不況です。失業率は5%まで上がり、バブル経済がはじめて株価は大暴落し、平成15（2003）年3月に日経平均株価はバブル崩壊後の最安値を記録。4年制大学の卒業生の就職率は56.9%にまで落ち込み、就職戦線は買い手市場になりました。より良い就職をするために、習得が難しい語学スキルを身につけたいと考える高校生が女性を中心に増えました。大学生の厳しい就職氷河期が神田外語学院の入学者数増加を後押ししたのです。



第26回 長谷川貢神田外語学院元教務センター長  
教育の質と成果にこだわる専門学校を目指して

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」



景気回復により入学者数がふたたび減少  
社会情勢に左右される専門学校の経営

入学者数が復活したのはつかの間でした。平成17（2005）年に1028人だった入学者数は、平成18（2006）年に200人以上減少し、平成20（2008）年には過去最低の705人にまで落ち込みました。原因は日本経済の回復です。日経平均株価は景気回復の期待から上昇し続けていきました。大学の就職率も回復し、経済的に余裕のある家庭は子どもを大学に進学させるようになったのです。

水野学院長からは「長谷川くん、幹部には『専門学校をやめて、神田外語大学だけにしようか』と考えている人もいるよ」と言われた記憶があります。入学者数のかつてない減少に経営陣のショックも相当大きかったようです。

神田外語学院の入学者数は、社会情勢によって変化する大学生の就職率と反比例するように増減しています。つまり、学院は大学と学生の取り合いをしているのです。高校生からすれば、語学は、大学でも、専門学校でも学べるので進路を変更しやすい。少しでもメリットがある方を選ぶのです。学院の経営陣は、安定的に入学者を確保するためにはどうしたらよいか真剣に考え始めていました。

平成20（2008）年の秋、リーマンショックが起きました。日本経済はふたたび大打撃を受けて、株価は最安値を更新し続ける日々。アメリカではクライスラーやGM（ゼネラルモーターズ）が倒産し世界同時不況に突入。日本でもJALが経営破綻しました。戦後、日本の大人たちが信じてきた「大企業神話」は崩壊し、高校生たちも、有名大学に進学して大企業へ就職することに疑問を抱くようになります。この不況によって、神田外語学院の入学者数はふたたび増え始め、平成22（2010）年には志願者数が1000人を超えました。

平成22（2010）年4月に糟谷幸徳さんが神田外語学院の副学院長に就任しました。糟谷さんは、みずほ銀行の出身で財務と経営のプロです。佐野隆治会長（※1）の方針のもと、「学院は女子学生が7割以上を占める。校舎がきれいかどうかは重要な学校選びの決め手になる」ことを明言し、次々と学習施設の新設や校舎の改装を行いました。実際、数多くの新入生たちが「この校舎で学びたいと思った」と志望動機を書いています。きれいで充実した学習環境が、オープンキャンパスなどで訪れた高校生を魅了しました。

※1 佐野隆治：昭和9（1934）年、佐野学園の創立者の佐野公一、きく枝の長男として生まれ、昭和38（1963）年、経営に参画。第3代理事長（昭和63（1988）年～平成22（2010）年）として、神田外語グループの発展において中心的な役割を果たした後、平成29（2017）年3月に永眠するまで会長を務めた。享年82歳。



第26回 長谷川貢神田外語学院元教務センター長  
教育の質と成果にこだわる専門学校を目指して

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」



糟谷学院長と議論を重ねて模索した  
高校生に響く“学院のメリット”

平成23（2011）年に東日本大震災が起きると、糟谷さんは「地震でもつぶれない安心感がなければ、この学校を選んでもらえない」と、すぐに校舎の耐震補強工事を実施しました。当時は入学者数が回復期に入っていたとはいえ、学生確保の道筋はまだ見えていませんでした。大変な出費であり、反対意見もあったようです。耐震工事はまさに英断でした。その後、令和2（2020）年まで入学者数は右肩上がりが増えていったので、出費以上の効果をもたらしたと思います。



平成24（2012）年4月、糟谷さんが神田外語学院の学院長に就任しました。高校から学院への入学者を安定的に確保するために、糟谷学院長と私は高校生が学院を志願するメリットをいかに打ち出すかについて議論を重ねました。

大学へ行くのが当たり前の時代、専門学校への進学者そのものが減っている。学院に来てもらうためのメリットを明確に伝えられなければ、学生の増加は見込めないという共通の意識が私と糟谷学院長にはありました。

糟谷学院長は経営のプロで、私は語学教育のプロ。とても良いコンビだったと思います。いつも見ている方向性は同じでした。それと糟谷学院長は決して学院長室にこもらずに、職員のいるフロアで一緒に仕事をしていたので、とても風通しが良い環境で仕事ことができました。



高校生に打ち出すべき神田外語学院に進学するメリットとは何か。糟谷学院長とまとめた強化方針は、学院に来れば、「必ず就職できる」に加えて、「TOEICで高得点が取れる」「英語が話せるようになる」「志望大学へ編入できる」の3本柱でした。

まず、TOEICです。就職試験ではTOEICの点数が重要です。しかし、独学で800点以上を取るのはかなり難しいこと。であれば、学院在学中にTOEICで高得点を確実に取れることをうたえるような指導体制を確立すればいい。糟谷学院長が「TOEICを伸ばすにはどうしたらいいんだ？」と聞くので、「TOEICの指導ノウハウを持った教員が必要です」と答えました。

当時、TOEIC参考書のベストセラー「金のフレーズ」の著者であるTEX加藤さんが学院の非常勤講師をしていました。糟谷学院長は「彼をうちの職員にしよう」と言いたして、学院長の権限で採用しました。さまざまな手続きを省略したスピーディな経営決断でした。加藤さんが講師陣を研修するとともに、3号館1階にはTOEIC学習相談室を新設。学院の中期経営計画にも卒業時のTOEIC平均700点を盛り込み、教職員総動員でTOEICの得点アップに努めたのです。結果として、学院全体で卒業時の平均点が660点、英語専攻科は680点まで伸びました。



第26回 長谷川貢神田外語学院元教務センター長  
教育の質と成果にこだわる専門学校を目指して

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」



浮かび上がった大学編入学という新たな道と  
経営トップが反対するなかでの支援体制の強化

学院へ進学するメリットのふたつ目の柱は、英会話力の向上です。「神田外語学院の卒業生は英語を話せる」という企業の期待に応える会話力を身につけるのです。英会話は、英語で話す機会、英語の音を浴びる機会の多さに比例して上達します。言語習得法の研究では、年間600時間以上は英語を話さないと会話ができるようにならないことが通説でした。その時間を確保するためには、週5回以上、外国人教員の授業を受ける必要があります。そこでカリキュラムを改定し、ネイティブが教える英会話の授業「EIC（English for International Communication）」を増やしました。

そして、3つ目の柱は大学への編入学です。少し時間はさかのぼります。平成20（2008）年秋にリーマンショックが起きた先行きの不安から、確かな語学スキルを身につけられる神田外語学院への入学者数が回復し始めていた時期のことです。英語専攻科の上位クラス的女子学生が東京外国語大学の3年次編入試験に合格したという知らせが入りました。早速、その学生に話を聞いてみました。



彼女は学院入学直後から大学編入学の予備校に通い始めました。英語専攻科の上位クラスは、TOEIC800点以上はざらなので編入学に必要な英語力は学院で自然に養えた。予備校で学んだのは学部の専門科目のみ。彼女の話から浮かび上がったのは、神田外語学院から大学に編入学するという新たな進路のかたちでした。

神田外語学院から大学3年次への編入学を目指せば、浪人をせずに現役のときはかなわなかった上位の大学にも挑戦できます。TOEIC高得点や会話力など、英語を仕上げってから大学に行くという利点もある。編入学の受験対策を支援できれば、予備校に通う必要もない。この道筋を明確に示せば大学進学を視野に入れた男子学生が神田外語学院に入学する。そんな構想を描き始めたのです。



しかし、トップである佐野会長（当時は理事長）には「学院を予備校にはしない。大学へ編入学したい学生を支援するのはいいが、職員は出さないぞ」と言われました。神田外語学院は昭和32（1957）年に佐野会長のお父様である佐野公一先生、お母様の佐野さく枝先生が開校された学校です。佐野会長も長年、学院の経営を通じて学生を育ててきました。語学教育を通じて世界の懸け橋になる人を育てたい。その想いが強かったので学院を大学編入学の予備校にはしたくなかったのでしょうか。オーナーとしての佐野会長の意思は十分に理解できました。

新たな予算を設けて、大学への編入学を支援する専任職員を配置することはできないので、教務センターの職員が従来の業務と兼任するかたちで支援を始めました。その後、英語専攻科に編入学専攻を設けました。「編入学」を掲げましたが、あくまで教育の目的は学院のカリキュラムに沿って英語を学ぶことでした。

第26回 長谷川貢神田外語学院元教務センター長  
教育の質と成果にこだわる専門学校を目指して

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」



学院はあくまで語学の専門学校である  
今でもその信念は継承されている

一方、神田外語学院が公に大学編入学を打ち出したことによって、学院の英語力の高い学生を確保できることを知った大学側は積極的に受け入れるようになりました。学院の担当職員が積極的に働きかけたことで、編入学の指定校推薦枠を設ける大学も増えていきました。

滋賀大学、埼玉大学、宇都宮大学などの国公立大学へ編入学する学生が増えていきました。広報部も積極的に神田外語学院からの大学編入学という進路を打ち出し、大学進学を志向する男子高校生の志願者が増えていきました。こういった成果を佐野会長にも喜んでいただき、平成22（2010）年に「大学編入センター」が設立され、本格的な支援体制ができたのです。長年、神田外語学院の役割は、「社会へ語学が強い学生を送り出す」ことでしたが、これに「大学へ語学が強い学生を送り出す」ことが加わった。これは、大きな躍進でした。

「学院を予備校にはしない」という佐野会長の絶対的な方針があったおかげで、神田外語学院は本来のミッションを見失わなかったと思います。学院の編入学志望の学生は、それぞれの学科のカリキュラムをこなしたうえで、放課後の課外講座で英語以外の編入学試験対策をしています。日々の授業で英語を鍛えること、TOEICの点数を伸ばすことは編入学試験でも最大の強みとなります。

しかし、難関大学に編入学をするには綿密な準備と対策が必要です。編入学専攻のコースでも専門科目の試験対策の授業はカリキュラムに入っていない。「英語以外の受験対策もカリキュラムに入れた方がいい」という学内の意見もありました。しかし、それでは予備校になってしまいます。神田外語学院はあくまで語学の専門学校です。語学ができる学生を育てなければ意味がありません。

この信念をぶらさないことについては、糟谷学院長とも終始一致していました。糟谷学院長と意思疎通が図れたからこそ、佐野会長の意図をくみながら、大学への編入学を推進できたのです。私ひとりであれば、会長に「学院を予備校にはしない」と言われたら次の手が打てなかったかもしれません。佐野会長は平成29（2017）年にご逝去されましたが、その後も教務部では、神田外語学院はあくまで語学の専門学校であるという信念は継承されていきました。

3本柱の施策が功を奏し、学院への入学者数は右肩上がりが増加し、令和元（2019）年には1368人、令和2（2020）年には1280人に上りました。その半数が大学編入学志望者です。4年制大学の編入学試験（若干名の進学試験含む）の合格者数は平成30（2018）年から令和2（2020）年の3年間の卒業生で延べ915人。国公立大学への入学者は最も多かった年で45人に上りました。



第26回 長谷川貢神田外語学院元教務センター長  
教育の質と成果にこだわる専門学校を目指して

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」



コロナ禍を経て高まるグローバル化のなかで  
英語によるコミュニケーションは必須の能力

2010年代の日本は、海外からの旅行者が増え続けていたので、「英会話をやらなきゃ」という雰囲気があったし、経済も悪くなかったので留学する学生も多くいました。しかし、令和2（2020）年初頭から本格化し始めた新型コロナウイルスのパンデミックにより、海外との往来が困難となり、街角からは外国人旅行者が消えました。神田外語学院が専門教育を行う観光と航空の産業は苦境に陥りました。学院への入学者数は急減し、令和4（2022）年には700人を切り、過去最低にまで落ち込みました。

学院で学ぶ学生たちは、学校に来て、クラスで同級生と一緒に学ぶことで競争心が自然に芽生えます。友達が「帰りにVISTA（※2）で勉強していく」と言えば、「私も、がんばる！」となるのです。いわゆる「クラスダイナミクス」は、学生の学習を後押しするうえで大変重要です。

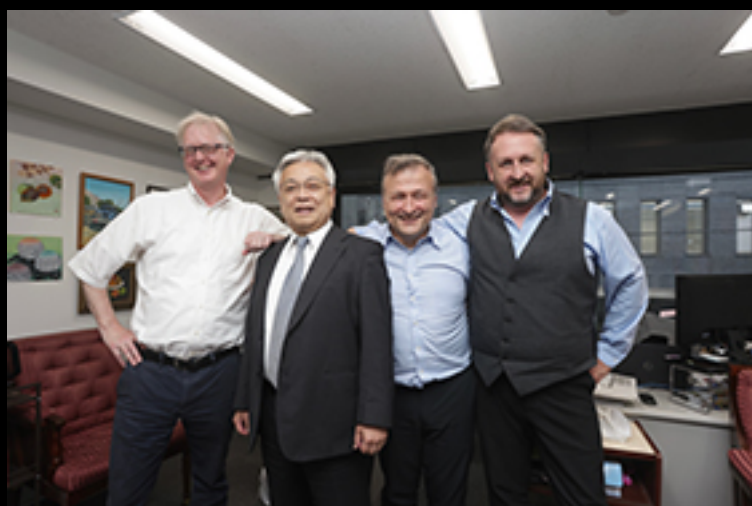
コロナ禍において学院ではオンライン授業を導入しました。しかし、オンライン授業ではクラスダイナミクスが起きません。切磋琢磨ができないのです。学生の多くは学校に来ないと、勉強時間ではなく、バイトのシフトを増やします。結果として、学院生のTOEIC平均点はコロナ禍前から30点ほど下がりました。コロナ禍は「クラスダイナミクス」の重要性を再認識させてくれました。

令和5（2023）年に入り、マスクの着用、飲食店での会食、海外旅行が緩和され、コロナ禍前並みの水準にまで経済活動が回復してきました。外国人旅行者も急激に増加しました。日本の日常に、英語を話す環境が戻ってきたのです。

グローバル化の波は止められません。日本人も海外に出て行かなければ日本の経済は立ち行かなくなります。そして、外国人とのやりとりの基本は英語です。「AIが発達すれば英語はできなくてもいい」と言う人がいますが、そんなことは決してありません。人と人の会話、つまり音声言語では、声の高さ、大きさ、抑揚、速さ、そして間を感じながら意思のやりとりをしています。AIがこの領域までカバーする日はずっと先のことでしょう。

たとえ、AIが高度に発達しても、翻訳機に頼って会話をしていたら「外国人とやりとりするなら英語ぐらい話せるようになれよ」と相手にされません。機械を通じてコミュニケーションすると会話内容のデータが残るので嫌がられます。企業も社員に対して「翻訳機があるから英語は話せなくていい」という考えを認めるとは思えません。そして何よりも、対面でタイムラグのないやりとりをしているからこそ共感やアイデアが生まれるのです。

※2 VISTA（Village of Innovative Study and Training Access）：学生たちの自立とそれぞれの学習スタイルを身につけることを目的としてつくられた自立型言語学習施設。



第26回 長谷川貢神田外語学院元教務センター長  
教育の質と成果にこだわる専門学校を目指して

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」



語学教育の質と明確な成果を追い求めれば  
高校生たちが来てくれる神田外語学院になる

高校生には自分の英語力を見つめてほしい。学生のうちに英語は話せるようになり、専門知識を海外でも通用するレベルの英語で話せるようになる。これが大原則にならなければ、日本はグローバル化した世界から取り残されます。

英語で専門分野の質疑応答ができるようになるには、大変な時間と労力をかけて英語を学ばなければなりません。大学の選択科目で英会話を学んだだけでは絶対に話せるようになりません。賢い高校生は必ず、そこに気付きます。そして、神田外語学院に必ず戻ってくるはず。そのときに、神田外語学院は、英語教育の専門学校として質の高い教育をして、輝いていなければなりません。

神田外語学院が取り組むべきは語学教育の質を保つことであり、進化させることです。これまでは専門学校に来て、英語が話せるようになればよかった。でも、高校でも英語の授業はCLIL (Content and Language Integrated Learning) といって、コンテンツベースで学ぶようになっているので単に英語が話せるだけでは不十分なのです。

目標とコンテンツを持たせたESP (English as a Specific Purpose) の語学教育を充実させていく。語学力を必要とする分野の専攻やコースを強化・新設し、語学に専門分野の学びをプラスするのです。学院では、令和5 (2023) 年4月にはデジタルコミュニケーション科を新設しました。コロナ禍からの巻き返しの始まりです。

これからの神田外語学院には、専門学校という既成概念から離れ、進んだ語学教育、手法、試みを続けていってほしい。もっともっと語学教育の質と明確な成果を追い求めるべきだと私は考えています。入学させたら必ず成果を持たせて卒業させる。そんな気概を全ての職員、教員が持つことができれば、高校生たちが来てくれる神田外語学院になると思います。



長谷川貢 (はせがわみつぐ)

昭和32 (1957) 年9月、横浜市金沢区生まれ。昭和56 (1981) 年3月、明治大学文学部英米文学科卒業。神奈川県で高校教員を経て、ニューヨーク大学院修士課程に留学し、昭和61 (1986) 年6月に英語教授法 (MA-TESOL) 取得。昭和63 (1988) 年4月に神田外語学院非常勤講師となり、平成元 (1989) 年に専任講師として入職。平成15 (2003) 年4月に学校法人佐野学園の職員となり、神田外語学院教務センター教育部門長に就任。以来、同センター長、学院長補佐として学院の教育部門の責任者を担い続けた。令和4 (2022) 年より学校法人佐野学園副理事に就任するとともに、令和5 (2023) 年4月からは神田外語大学アカデミックサクセスセンター副センター長を兼任している。

